

第二号：第十三首～第四十七首

前回に続いて第二号を順々に読んでいきたい。これまでをまとめると、親神は「せかいの心を勇める」(二号1) ゆえに「陽気づとめ」の完成を望み(二号3)、病気などを通してそれに参画する「つとめ人衆」を引き寄せている(二号7・8)。しかし、続く第十三・十四首を読むとそれらは闇雲な仕方ではなされるのではないことが伺われる。

第二号は「早くおもてに出ようと思っけていても、道がなくては出るに出られない」(二号13)、また、「その道を早く付けたいと思っけていても、他の所で付けることはできない」(二号14)と歌っており、大意は「親神としてはその思いや教えを一刻も早く世界に広めたいが未だその途がないので広めることができず、またその筋道がどこを通過してもいいというわけではない」となる。つまり、「おもてに出る」と表現されるような仕方で親神の思いや教えが広まる為にはただその情報が広がるということではなくて、続けて「(そのように教えが広まる)筋道を心から思うならば、胸をしずめて万事よく考えよ」(二号15)と諭されるように、その思いを伝える人や受け取る人の本心が親神の御心に叶っていなければならない。

さらに続けて、親神は「(人間は)この話は一体どういうことだろうかと思っけているが、神の打ち分け場所が出来るのを急いでいる」(二号16)と述べて、ただ人々の精神だけを問題にするのではなく、その教えが広まる道筋において「打ち分け場所」という特別な場所を提示する。『注釈』によれば、それは親神に救済を祈願する場所で、世界中に合計93カ所できる。そして、その場所は「ぢば」へと向かう巡礼の意味合いを持っており、どのような難病を抱えた人であろうとそこを順々に参るうちに病気が救かるとされているが、注意すべきことに、たとえその内の1カ所が参拝の困難な草深い場所であっても決して略することないようにと説かれている。「打ち分け」という言葉は、文脈的に「打って出る」と同様の語感を持ち、世界の救済を遂げようとする親神の積極的な態度を示していると言えよう。

そして、親神は続く数首で改めて「屋敷の掃除」として心の「ほこり」を払うこと、「陽気づとめ」の完成を急いでいること、そのために身体に障りを与えて人を引き寄せていることを説いている(二号18～24)。

次に、第二号は「高山の池の水」というこれまでとは少し異なる表現を用いて、人々の「混沌とした心」を「澄ます」ことを論じている。ここでまず注意したいのが、『注釈』ではこの第二十五首の「高山」を第二十九首とともに「山深い場所」と捉えているのに対して、その後の第四十・四十六首の「高山」は「上に立つ人々」の意味に解釈していることだ。つまり、同じ「高山」という言葉でも水が湧き立つ池と関連する場合は「山深い場所」を意味しており、それ以外の文脈では主に「上に立つ人々」を表している。したがってどの言葉もそうであるように「高山」という言葉も多義的に理解しなければならない。

この「高山の池の水」の喩えは親神の教えを聞くうちに人々の心の「濁り」が清められていく信仰のプロセスを示している。つまり、「高山の池に湧いた(本来清らかな)水でも最初の出端は濁って混沌としており」(二号25)、「だんだんと心しずめ

て胸の内を省みること澄んだ水と変わってくる」(二号26)と述べて、人々に自らの心の反省を促している。しかし、心を清めるのはただ人間の努力だけによるのではない。第二号は「(親神が)山中の水の中へと入っけていき、どのような水も澄ます」(二号27)と述べて、それは親神の働きも加わっけて初めて為され、しかもどのような「濁り」も「澄ます」と説いている。そして、「日々に親神の教えを奉じる人は自らの心を治めて通っけてくれ、将来は必ず頼もしい道になるから」(二号28)と先への楽しみを与えて心を磨く人々を励ましている。

さて、「高山」と同じように、「から」と「にほん」というテーマも第二号以降たびたび登場する(二号31)。『注釈』によれば、「にほん」とは端的に言えば「人間創造の場所である『ぢば』のある所」であり、「から」とは「創造された人間が『ぢば』より渡っけていった所」とされ、また、「にほんのもの」とは「最初に親神に生み下ろされた者」であり、「とふじん」(「から」の者)とは「つづいて生み下ろされた者」として解されている。つまり、「にほん」や「から」といった言葉は人間創造における生成的な順序を示すために使われている。したがって漢字に当てると「にほん」は「日本」、「から」は「漢/唐」と解することができるがそのような地政学的な表象はあくまでも二義的であり、一義的には親神の人間創造の話と関連付けて理解しなければならない。

この「から」と「にほん」で述べようとしていることは、人間創造における人間の生成的な順序が人々に正しく理解されおらず、特に「上に立つ人々」によって、根源の神としての親神の教えがその枝葉としての世間の教えと同じように扱われていることを親神がやるせなく感じていることだ(二号32)。そこで、親神は「から」と「にほん」を明確に区別して本末転倒を正すことで混沌とする世界を治めることを述べ(二号34)、これからは「上に立つ人々」の心もはっきり見分けていくと論じている(二号36)。

当時は警察など「上に立つ人々」の影響が大きく、世間からの妨げに対してついには参詣を断らなければならない状況であったが、それでも親神は「何も心配することはない」(二号37・38)と歌い、「かんろだい」が「にほん」の治まりとなると論じている(二号39)。「かんろだい」については追々明らかにされるが、ここでは端的に「人間創造の場所を明確に示すもの」と捉えることができ、先述した「から」に対して「にほん」を第一義となるように順序を正すことを述べていると解せよう。そして、高い山の「上に立つ人々」の間でも「から」と「にほん」を分けて、その順序を明確にすると論されている(二号46・47)。

その際、「から」と「にほん」を分けるのは「火と水」を入れて為されると説かれている。『注釈』によれば、この場合の「火と水」とは灯火や体温などの「火」、あるいは雨や生活用水や身体の潤いといった「水」、つまり親神の絶大なる恵み・働きを表したものとされ、そのような親神の力によってそれらを分けると解されている。さらにまた、このような「から」と「にほん」の文脈に挿入されるようにして、ある信者の状況を通して人間の心の善悪がそのまま現実の出来事として現れてくることが示されている(二号43～45)。